

Title	「口ぶえ」試論
Sub Title	
Author	持田, 叙子(Mochida, Nobuko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1989
Jtitle	三田國文 No.11 (1989. 6) ,p.29- 44
JaLC DOI	10.14991/002.19890600-0029
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19890600-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「口ぶえ」試論

持田叙子

I

「口ぶえ」は、大正三年三月二十四日から四月十九日まで『日刊不二新聞』に二十五段に分けて連載された、折口信夫の「自叙伝風の」(大2・9・26 武田祐吉宛書簡に拠る。)小説である。同右書簡によると折口は、大正二年九月には二百頁余の「口ぶえ」を書き上げていたらしいが、その草稿は現在不明である。ところで「口ぶえ」は折口の他の小説、「神の嫁」や「死者の書」と共に全集二十四巻創作篇に収録されているが、その全集版と『日刊不二新聞』初出との間に些かの異同がある。折口博士記念古代研究所には、折口所蔵の『日刊不二新聞』所載「口ぶえ」の切抜が保存されている

が、そこには本文右に折口の手で改訂・補筆が書き込まれている。全集版はその改変に従い、編まれたものと考えられる。初出と全集版との異同を全体的に見渡すと、内容に関する大きな異同は一〇三段において目立ち、後は主に句読点について入念な改変が施されている。特に読点には非常な神経が払われ、初出にはなかった読点が書き込みの段階で実に多くの箇所に入られ、文章の伝える意味をより明確にしようとする折口の強い意志がうかがわれる。追々短歌における句読点重視の流れとあわせて、注目すべき点であろう。本稿においては、句読点・仮名書きと漢字表記の違い・振り仮名の有無などの異同は省略し、内容に関する校異のみを次の表に整理すると共に、「口ぶえ」について若干の考察を述べてみたいと思う。

全集頁	全 集 版	『日 刊 不 二 新 聞』所 載
1	生徒らの、めりやすのしやつを脱ぐ、爽やかな このごろ、 かひだるい、 こすりつけて居る犬になって見たい心もちがする。	生徒らがめりやすのしやつを脱ぐなつかしい このごろになって やるせなくかひだるい、 こすりつけたい様な心もちがするのだ。

この気持ち、
叔母にさへ、聴いて貰ふわけには
いかなかった。

寧ろ無貧著^ななのを誇る風の傾きのある彼である。
ぞく／＼言ひしらぬ快感を覚えるのであった。

安良の身のまはり

根がおほまかでもあるが、凡でもあつた彼のおひたちが、積りつもつて、かういふつくろひ心地を楽しむようになつたらしいのである。
ぢり／＼するほど、石段つゞきの坂道の
のし出てゐた。

目をつけて、

起きるから、いつもの変な心もち
襲ひかゝつてゐた。

あると思へど、

そのまゝ歩き出した。

坂の上は、寺町の通りである。

其を五六町行くと、学校だ。

席に著いたり、人の机にたちはだかつたりして、がや／＼さわいである。

顔から火の出るのを感じた。

身をすぼめるやうに、

組ちゆうの若者の

とつさにあたまに手をやつて、

蒸発する汗を知つた。

頭をおさへた瞬間の姿が、心もちが、には、かしにでもなつたやうに、反
省せられて、再激しく、消え入りたい気がした。

先生は

朝の光を、せなか一ぱいに受けて、

仆れてゐた。

いつまでも

膚を圧する感覚を、

彼は汗かきである。

このなやましいありさまを
かういふ気分^{ふん}に屢々なやまされることをさへ叔母に聴いて貰ふわけには
いかなかった。

寧ろ無貧著^ななのを誇る風な傾向^{へんこう}のある子である。

ぞく／＼といひしらぬ快感が湧いて来るのであった。

安良のまはり

根がおほまかな彼のおひたちなどが積りつもつて、かういふつくろひ心地をよるこぶやうになつたらしい。
もどかしいほど石段のつゞく阪道の
のび出てゐた。

目を注いで、

朝かられいの変な心もち
襲ひかゝつてゐる。

あつたのだと思ふと、

ひたすらあるき出した。

ナシ

五六町ほど行くと、学校である。

席に著いてがや／＼さわいである。

顔から火の出るおもひで、

身をすぼめて

組ちゆうの

突壁にはつと手をあたまにやつて、

汗が蒸発するのだと知つた。

欺かれて頭をおさへた瞬間の喜劇的な心もちが反省せられて、清江入り
たい様な気がした。

教師は

朝の光を、清しみながら、

仆れて、

いつまでも／＼

膚を圧する豊かな感覚を

彼は非常な汗かきである。

湧いて、

皮膚を伝うてゐる

今日は

はじめから、この教科書の内容に、興味はなかった。

べるそいすの物語

胸をどらしたのも、二三年あとに

ふはくした雪のうへに、ふりつつの白い胸から、新しい血の走るあり

さまをおもひ浮べてゐた。その夢のやうな予期が、

なりさうなのを、

つまらなく感じた。

とむねをつかれるものを覚えた。

からだちゆうの血が、

の叫びを聞いた。

ナシ

太い声を

言ふべき語が浮ばなかった。

ナシ

ぼたんの一つは、ちぎれて、飛んだ。

かけて居ないのである。

白々として

生徒等の前に――。

立つた。

同年級の生徒のある者は

腕をあげ――

さびしいあみ

かへりは

さばくした心

夕立に

午後の日をあびて居た。

新古今集の歌人
晩年が、何となく蕭條たるものに思はれて来た。

迸って、

皮膚をながれてゐる

ナシ

のつけからこんな話に同感をもつてゐなかった。

ばあしうすの物語

胸をどらした頃はもう二三年もあとに

柔らかな雪のうへに、白い胸からさはやかな血の走るありさまをおもひ

浮べてゐた夢のやうなあらましが、

至りさうなのを、

情けなく感じた。

とむねをつかれた。

はつと渾身の血が、

と叫んだ。

目がまひさうに思はれて来る。

と太い声を

突嗟に言ふべき語が見出せなかった。

血が脈ばしる。

ナシ

かけてをらなかったのである。

今白々として

衆生の前に陽炎うた。

立つたのである。

二三年の生徒は、

腕をあげ――

さびしいあみ

かへりは

さばくした心

夕立に

午後の日ざしにわなゝいて見江る。

新古今集第一の歌人
蕭條たる末路に同情することが出来た。

36	35	34	33	32	31	30	28	27	23	22	20	19	9	8	7
頬に伝はるものを覚えた。 一枚の葉が、安良の目の前に落ちた。 見あげる 柔かくふくらんだ、 踏みかへたのが、見えた。 運動場の片隅に、十坪ばかりの地を敵うて、畑を作つて居る彼であつた。 かためてゐた。 といふ 教室を、 声が、 沈香の沁みこんだ 鳴く。 由兵衛が物語 やがて、 ひきかへすと、あぶない足もとを、 この時、 乳母であつた。 自身の乳母に かどへ逃げて出る その容子 乳母が そのさとへ 来るのどすえ 言やはります。 おやな、 ゐてくれたはる おやな 欲しい 一秒々々 匍匐															

36	35	34	33	32	31	30	28	27	23	22	20	19	9	8	7
頬に寒う伝はる涙をおぼえた。 柿の病葉が一つ、安良のまのあたりに落ちた。 ふと見あげる 柔かなふくらみをもつた、 踏みかへてゐるのがうつたのである。 彼は運動場の片隅に、十坪ばかりの地を敵うて畑をこしらへておいた。 かうかためてゐた。 との 教室から 声は 沈香の香の沁みこんだ 鳴いた。 由兵衛の物語 ナシ ひきかへすあぶない足もとを、 ナシ 乳母である。 おやすといふこの乳母に かどへ彼は逃げて出る 容子 おやすが 乳母のさとへ 来るのどすえ 言やはります。 おやす、 ゐてくれてはる おやす 欲しい 一分一分 よろばひ															

76	75	61	59	55	51	47	46	45	43	39	37
来るらしい、 ところ／＼に、幹に 曇つて来て、 涙がぼろ／＼と、 つきあげ窓 こちらをむいて、 僕ひとり行かんらんかいな 古い榎 磧に、 白く 大きな方の そこから たまらんです よその若者は 源さんが 目を閉ぢて、 これも疑もなく、 香朝といふ 野獣の姿を思つて 早く待つ様な心が湧いた。											
来るのを思はせる、 ところ／＼の幹の 曇りて 涙がほろほろと あかり窓 うちらをむいて、 僕だけ行て来る 大きな榎 磧には 白い 大きな方は そこから たまらんですよ その若者は 源さんが 目を閉ぢ、 これは疑もなく、 花朝といふ 野獣が思つて 早く待つてゐた。											

※外来語、あるいは特殊な固有名詞について折口は初出では傍点、全集版では傍線を使用している。

※七段落の最後に、(今日浜村貴鳳歿す)という書き込みがある。七段落目は「貴鳳や貴若」による浄瑠璃を安良が聴く場面である。おそらく「貴鳳や貴若」は、折口の少年時代に実在した浄瑠璃太夫であり、「浜村貴鳳」とは、貴鳳を指すのであろう。彼の死亡年月日が明らかになれば、『日刊不二新聞』への書き込みがいつ行われたかがわかるわけであるが、本稿ではまだその点は調べていない。

II

「口ぶえ」は、汗ばむような初夏の騒がしい中学校の教室で、主人公漆間安良(シマヤス)がいきなりスケープ・ゴートに仕立て上げられるところから始まる。遅刻しないよう息を弾ませ教室に入ってきた安良を

見て、他の少年達は「一度にとつと笑ひ出す」。その理由は、「漆間のあたまたに、火事がいてるで。」と叫んだ一人の生徒によつて明らかにされる。安良は、頭から蒸発する汗の湯気をからかわれたのである。二段目で説明されるように、安良は「汗かき」である。初出では「非常な汗かき」と強調されている。初夏になってから、安良

は疲労感をはじめとする体の不調を覚えていた。それが病氣というより、少年の内奥の「春のめざめ」に通底していることは、「やるせなくかひだるいからだ」「このなやましいありさま」「かういふ気分」に屢々なやまされる」とする初出の段階でより明確に示されている。彼が汗かきであることも、その一つの表れなのである。安良は学校で二度、スケープ・ゴートに仕立てあげられるが、二度とも原因は彼の「汗かき」、すなわち彼の内奥の「春のめざめ」に起因している。前述のように一度目はその頭髮の汗によって、二度目は汗故に「寝間を出るから、ねっとり」と膚がたるんでゐる様に感ぜられたので、いつもの半しやつを着ないで「学校に行ったため、彼は皆に辱しめられる。その日の体操の時間、蝦蟇とあだ名される教師の号令によって他の生徒は上衣を脱ぐが、安良は下にシャツを着ていないため、その号令に服し得ない。憤った教師は安良の上衣を引き剥がし、上半身裸の彼を壇上に立たせ号令をかけさせる。その場面は次のようである。

彼は壇上に顯れた。彼の上体は、一寸ちの糸をもかけて居ない(をひかないのである。)のである。彼の顔は、青白く見えた。心もち昂つた肩から、領へかけて、ほの／＼と流れる曲線、頭から胸へ、胸にたゆたうて臍のあたりへはしるたわみ、白々として如月の雪は、生徒等(衆生の前に立つたのである。)の前に――。その雪のきえたい思ひに、よわ／＼と彼は壇上に立つた。

※本文は全集版に拠る。()内は初出を示す。

こうした状況に到る伏線は、実は前の授業時間の描写の中にある。前の時間の教材の中に、ふりつつという少年が狼と闘う場面があった。安良は退屈を覚え教科書の内容を追う内、その行間に「ふ

かな雪のうへに、白い胸からさはやかな血の走るありさま

は／＼した雪のうへに、ふりつつの白い胸から、新しい血の迸るありさま」を幻想する。そのひそかな愉悅感を罰せられたかのように、今は安良自身が白い胸を露わに皆の前に立たされているのである。皆から見上げられる上半身裸の安良のたたずまいは、胸から血を流すふりつつの幻想と重なり、磔刑のキリスト像を強く連想させる。特に、全集版で「白々として如月の雪は、生徒等の前に――」※とある部分が、初出では「今白々として如月の雪は、衆生の前に陽炎うた。」(注 陽炎は禪者の注)となつてゐる点に注目したい。「衆生」とは生命あるものを指す仏教語である。この語を使う初出の情景には宗教的雰囲気濃く、あたかも生徒達は安良の周囲に集まる「衆生」であり、安良は彼らを俯瞰する賤しめられる神である、晩年の折口の短歌に「基督の 真はだかにして血の肌、見つゝわらへり。雪の中より」という一首があることからもうかがわれるように、真裸で衆目に晒され血を流し、その後よみがえるキリストは、官能的イメージを軸としながら、愛護若やスサノヲノミコト、ヤマトタケルノミコトにも通底する一旦賤しめられる神として、折口を強く惹きつけた神の像である。一度は処刑されながら、その後水の女である中将姫との交感によって新しい神としてよみがえる『死者の書』の大津皇子の中にも、キリストのイメージが色濃く看取される。中将姫の前に示頭する大津皇子は、白い胸と黄金の髪をもち、憂わしげに姫を俯瞰する若く美しい神である。

……其は黄金の髪である。髪の中から匂ひ出た莊嚴な顔、閉じた目が、憂ひを持って、見おろして居る。あゝ肩・胸・頭はな肌・冷え／＼とした白い肌・を／＼おいとほしい(『死者の書』) 体操教師に上衣を剥がされ壇上に立たされる少年安良の造型に

も、既に磔刑のキリストを具体像とする、傷つき賤しめられる神のモチーフの萌芽がみられる。そして注目すべきは、受苦の後よみがえる神のように、安良も教師や同級生に辱しめられた後必ず一種の昇華を得ている点である。頭髮の蒸氣を笑われた時も一度は「消え入りたい氣」がするが、「しばらくして、安らかな涼しい心地が彼に帰って来」る。また、上衣を剝がされ「よわ／＼と」壇上に立つた彼はしかし凜として号令をかけるのである。——「澄み透った声は、生徒らの耳に徹した。俘虜^{トビ}のやうに見えた彼は、きびしい、あみを含んで壇をおりて来る。」

この二度の場面において印象的なように、少年安良は賤しめと昇華、穢⁽²⁾と聖の迫間を振り子のように揺れ動く不安定な存在である。

二つの反措定の迫間での少年の彷徨は、この小説の至る所に浸透している基本的な構図である。たとえば、その構図は安良を巡る二人の人物の対照に最も意図的に表されている。安良は二人の上級生に心惹かれるが、二人は対極のタイプである。一人は岡沢といい、「十八九の浅黒い、にがみばした頭の毛の太い男で、五年級の優等生といはれてゐる庭球の選手」である。彼は学校帰り、安良をつけ回したり手紙を渡したりする。「激しい息さし、血ばしった瞳、ひし／＼と安良に圧しかゝる触覚」をもつ男で、川で水泳をしている折、水の中で安良に抱きつき頬に接吻するという大胆な行動を示す。安良は「ほんの暫くでも、あしたの男から逃げ出すことの出来なかつた、自身の心を打擲したく」思い、岡沢を「野獣のやうな性質」のある男とみなすのであるが、反面、岡沢のそうした性情・行為は安良の内奥の「春のめざめ」に呼応するものである。安良は「じやうひんで脆い心もち」を志向するはずなのに、それと矛盾し

て岡沢に惹かれる己れを自覚して混乱し、「すべての浄らかなものと、あらゆるけがらはしいものが、小さいあたまのなかで火の渦を巻」くような思いに促される。

一方、安良の心を惹くもう一人の上級生の名は渥美泰造という。渥美は岡沢とは対照的に「朗らかな、木海月を嚙む歯ざりはを思はせるしなやかなことばで、はれ／＼とした瞳をしても言ふ人」であり、「浄らかな人」として安良の憧憬する少年である。かたや肉欲、かたや精神性を強調される岡沢と渥美は、その行為・性情とも対比的に配置されている。

夏休みに入り、安良は同時に二通の手紙をうけとる。一通は岡沢からのもので、その幼稚な文面に安良は思わず噴き出す。もう一通は京都西山の寺に居る渥美からのものである。その「清らかな人の手紙」は安良に、西山の寺へ来るように誘うものであった。安良は心躍らせ西山へ向う。更に岡沢と安良の水中シーンをなぞるかのやうに、西山の谷川で二人が泳ぐ場面がある。岡沢が安良に肉体的接触を求めたのとは反対に、渥美と安良は「裸形をはちらふやうに」別々に脱衣し、水に入ってもお互いに離れた距離を保つ。こうしてみてゆくと、岡沢は肉欲・けがらわしいもの、渥美は精神性・浄らかなものを象徴するのであり、その二つの間で揺れ動く安良は結局、自らの心の望む通り渥美のいる西山へ行くことよって清浄な方向へと進み得たかにみえる。

しかしどうもそうした単純な方向軸ではわりきれないものが残る。なぜなら渥美の手紙を読んだ段階で、安良は既に渥美に対する自分の気持が岡沢に対する気持と同根のものであることを気づいているのであり、西山滞在中彼はずっと漠然とした罪悪感につきまと

われるのである。渥美へと牽引される方向軸は、必ずしも安良を清浄な境地へ昇華させるものではないらしい。そのことは「ロぶえ」の結末にも関る問題であるので、後述したい。

III

ところで、安良は始めから二つの反指定の間を揺れ動く不安な存在であったわけではない。かつて、彼は寢床で父に芭蕉や西行の詩歌を口うつしに暗誦させられ、そうした清々しい境地に一心に進もうとする。バランスのとれた世界に安住していた。その均衡が崩れ、穢れの要素が彼の世界に割り込んできたのは、ひとえにその成長過程に起きた「春のめざめ」のためである。性欲及びその昇華は、折口が生涯を通じ抱え込んだ問題であるが、モチーフの根源が少年の性欲に収斂される「ロぶえ」は、その問題を最も生な形で提出している作品であるといえることができる。

「ロぶえ」発表時は、男女間の性欲が盛んにとりあげられた自然主義の最盛期に当るが、それにしても発汗や耳鳴り、嘔吐、けだるさなどの身体感覚を通して少年の性愛を描くこの小説は、かなり異色の感がある。折口をそうした大胆なテーマにふみさらせた契機には、中学教師として少年の現実の悩みに寄せる熱い共感があり、更にその共感を力強く支える二つの先行作品があったと考えられる。一つは、無知故に少女を犯し、教師達の無理解により自殺や家出に追いつめられる少年を描いたヴェデキントの戯曲『春のめざめ』であり、一つは谷崎潤一郎の小説『鱒風』（明44・10 三田文学）である。『折口信夫手帖』（昭62 折口博士記念古代研究所編）によると、ヴェデキントのこの戯曲の翻訳は、明治四十三年、相馬政之助

訳「春の覚醒」として出版されている。『日刊不二新聞』に発表された「一月の文壇（中）」（大3・1・28⁽³⁾）という文芸時評において折口は、思春期にさしかかり子供の殻を脱皮しつつある自分の教え子達について語り、「春のめざめ」の快さをすこしでも余計に味はうとしてゐるかと思ふと、胸が迫るという意のことを述べている。また同年二月十五日、やはり『日刊不二新聞』に次のような三首の短歌を発表している。

白玉をあやぶみいだき　ねざめたる春の朝けに　目のうるむ子
ら（生徒らに）

わが雲霞　けふはおどけずしかすがにつゝまじやかにふるまふ
かなしさ

くづれ臥す若きけものを　なよ草の床に見いでゝ　かなしかり
けり

教え子を詠んだこの三首は、後に自筆歌集『うみやまのあひだ』（大正四年夏以後成立⁽⁴⁾、更に公刊処女歌集『海やまのあひだ』（大14・5 改造社）に収録されている。『海やまのあひだ』においてこの三首は、教え子を詠んだ連作「生徒」二十一首の中に組みこまれているが、「生徒」については折口自身「この連作は、うえでぎんと「春のめざめ」を下に踏んでをり、」と述べている。（『自歌自註』昭28口述）「一月の文壇（中）」にあった「春のめざめ」の語を考え合せると、「ロぶえ」執筆時、折口が教え子達の姿と重ねて、ヴェデキントの「少年悲劇」『春のめざめ』に強く牽引されていたことは明らかである。「ロぶえ」には、少年の大人への脱皮＝性欲のめざめが、混乱・悲劇を引き起すという「春のめざめ」の構図が濃厚に引き継がれている。

ところで、ヴェデキント『春のめざめ』は幼い少女が懐胎し、それを苦に少年が家出する、あるいはその少年の親友が己れの身体の変化に怯えて自殺するという衝撃的な内容を持つが、少年少女の性欲の具体的な描写などは全く無い。遊びつかれた少年少女が無知なまま一緒に納屋の藁の中で寝、お互いに何もわからぬまま少女が懐胎してしまうという設定である。少年少女の無垢を強調することにより、ヴェデキントは彼らを弾劾する周囲の大人の方を厳しく批判しようとしている。淡々とした『春のめざめ』に比べると、「口ぶえ」の描写は蒸せかえるような熱気を孕んでいる。その点で注目されるのが、もう一つの先行作品としての「颯風」である。「颯風」はいわば、青年の春のめざめを描いた小説である。ここでもやはり春のめざめは、主人公に悲劇をもたらす。美貌の青年画家直彦は、その無邪気で清純な性情を人々にうらやまれていたが、初めて女体に接することによって、己れの体内に「猛然と淫蕩な血」が目覚めたことを感ずる。その血に己れを支配されることを畏れた彼は禁欲の旅に出るが、結局恋する遊女の許に戻り淫淫を尽して頓死してしまう。禁欲の旅の間中、淫蕩な血は彼を苦しめつづける。とうとうそれは大きな腫れ物となり、彼を呻吟させる。

体内に鬱結して居た淫蕩の血が、真赤な腫れ物となつて、皮下に滲み、肉を破り、肌を腐らせつゝ、発散の途を求めるのであった。……中略……五ヶ月の旅の間、純潔な彼の心を呪つて居た悪性の血は、黄色い、赤黒い、毒々しい膿と化して、桜色の股の上を蚯蚓のやうに這ひながら、ぼた／＼と地面へ落ちた。蔽蚊や虻が夥しく其の上へ群がり集まつた。

直彦の美しい肉体に内包される毒血のイメージは、淫蕩な血筋と

病を父から受け継ぎながら、輝くような無垢の肉体をもつ、「口ぶえ」とはほぼ同時期の折口の小説「身毒丸」の主人公のイメージにも通底するものがある。直彦は体内に目覚めた淫蕩な血を畏れている。しかし彼の本心はどこかでその血に支配されることを願っている。直彦の中で淫蕩な要素と清純な要素とが保つて危い均衡と争闘を、谷崎は徹底的に青年の肉体を通して描いてみせる。特に直彦が、己れの肉体に陶然と見蕩れる湯浴みの場面は、その二つの要素の混然一体化として印象的である。

時々彼は、人気がない、がらんとした浴室に、腰から下を槽の中へ浸したまゝ、透き徹った湯の底で、さながら月光を浴びたやうに青白く光つてゐる太股のあたりを、恍惚と眺めることがあった。……中略……手拭をしめらせて、ざぶ／＼と灑のやうに体へ湯を注げば、其れが胸を伝はり、腹へ落ちて、臍の上へ流れて行く美しさ。二の腕のあたりには湯が脂で弾かれて玉のやうに結ばれてゐた。連銭草毛の駒の肌のやうに、皮膚の下からは、血が赤く濁染んで斑をなして居た。

青年が己が裸身に見とれるというシーンは『ドリアン・グレイの肖像』辺りから発想を得ているのかもしれないが、明治・大正期の小説の中にあってやはり特異であろう。思い起されるのは、「口ぶえ」においても、少年安良が湯上りに大きな鏡に己が裸身を映す印象的な場面があったことである。

ふりかへると斜に傾いた鏡のおもてに、ゆら／＼となびいて、安良の姿がうつてゐる。大理石の滑らかな膚を、日が朗らかに透いて見せた。近頃になって、むつちりと肉づいた肩のあたり、胸のやはらかなふくらみに、思ひ無げな腫をして、ちっと

目を注いでゐた。

ふと腕をあげて、項のあたりにくみあはせる。ほそやかな二の腕のまはりに、むく／＼と雪を束ねる。自身のからだのうちに潜んでゐた、不思議なものを見つけたやうに、好奇の心が張りつめて来た。……

この二つの場面は何といつても酷似している。「口ぶえ」の先蹤の一つとして「颯風」があることは、疑い得ないのではないか。折口は後年、「芸術の具体化——谷崎潤一郎氏を中心に——」（大11・2 白鳥）、「細雪」の女」（昭24・1 人間）において「颯風」に触れている。前者では、それまでの谷崎に顕著であつた技巧臭が「颯風」において消えたことを述べ、後者では四十年來の谷崎の愛読者であると述べ、次のように言う。

「颯風」に驚かされて、今一度「刺青」などから読み直して以來である。随分長い愛読の歴史を経たものだ。……

これによると折口は、明治四十四年『三田文学』発表の段階で「颯風」を読み、これに驚いて以前の谷崎の作品をも読み返し、以後彼の作品の読者となつたことになる。「颯風」は、それだけ深い感銘を「口ぶえ」執筆以前の折口に与えたのである。根太や膿、血などのおぞましいものを通して、青年の肉体に襲いかかる「春のめざめ」を見据えようとした「颯風」は、気取りやごまかしを振り捨てたスタイルとして、折口を激しくゆさぶつたのではないか。折口のそうした「颯風」への共鳴には、あるいは、誰もが当然通過してゆく成長の一階梯として少年の性欲をいとも軽やかに「理的に」「処理して」みせた森鷗外の「ウィタ・セクスアリス」（明42）への批判が射程に入っていたかもしれない。「口ぶえ」において少年の性欲

は、單なる成長への通過門として描かれてはいない。それは少年を突如混乱に陥れ、安定した世界をつき崩す。そしてその彼方に黒々と広がる異界へと少年を誘う獐猛な意志である。体内に噴出するそのもう一つの意志の猛威を、谷崎は輝く白い肌に内包される毒々しい血膿というダイナミックなイメージによって描いてみせた。同じように身体感覚に注目しながらも、「口ぶえ」にはそうしたダイナミズムはない。折口は、メリヤスシャツの肌ざわり、目覚めの倦怠感、寝汗など、少年の身体の内側に刻まれる繊細で微弱な日常のリズムを据え、そのことよつて返つて生々しく少年の性欲に迫るのである。

IV

前述したように、安良は賤しめと昇華の間を揺れ動く存在であり、彼自身は常に決定的な昇華の契機を捉えることを願っている。安良が時として賤しい存在に貶められる契機が、彼の内奥の春のめざめに在ることは明らかである。しかし彼の昇華、ひいてはよみがえりの契機はどこにあるのか——。昇華の契機は安良の周縁にさまざまな形でちりばめられている。例えば初夏の爽やかな青空と草花、夕日を詠じた歌人家隆や芭蕉、西行の蕭条とした境地、散歩道の途中にある藤井寺、八幡宮——。種々の事物や場所が安良の心を惹き、彼にある種の安らぎを与える。しかしその中のいずれが安良によみがえりにつながる昇華を与え得るのかは、必ずしも明確にされていない。安良を決定的な昇華へ導く契機として、まず考えられるのは渥美泰造の存在である。安良の彼への強い牽引は、この小説をひっぱる一つの力として顕著だからである。しかし二章で述べた

ように、渥美へと牽引される安良の思いは結局、岡沢に対するものと同根なのであり、渥美と岡沢は安良を牽引する対極の力と見えながら、実は双方とも安良自身の合せ鏡に映った姿なのではないか。

性欲を濃く纏綿させる岡沢は安良の一面であり、渾らかな境地を志向する渥美もまた安良の一面である。安良は、自分を高みへと引き上げる強い力を「渾らかな人」＝渥美に期待していた。しかし西山の寺に居る渥美からの手紙を受け取って以来、そうした期待に疑いが抱かれ始める。その手紙は「どうも彼の胸にしづくりと納得の行かぬ処があるやうに思はれる」。安良はあの爽やかな人に「どうしてこんな手紙が書けるのだらう」と訝かるのである。その手紙は安良に、秘かな恋心を打ち明けているかのように思われる。しかし安良は既に、そうした恋心が性欲に根ざすものであることを気づいている。彼は、自分が抱いているのと同じ「むさい処に根ざした心」を渥美が抱いているとは到底信じられない。その疑問を解くためにも、安良は西山の寺へ向うのである。渥美に逢った安良は、やはり彼を「仏のやうな人」として憧憬しつつける。しかし「口ぶえ」の叙述は、渥美がやはり安良と同じような懊悩を内包し、それ故に山に籠っていることを示唆している。安良の記憶の中の渥美は「はれん」とした瞳をしてもの言ふ人であったはずだが、西山での渥美のイメージはそれとはかなり異なる。彼は口数も少く悄然と考えこんでいることが多い。特に安良と並んで谷川をみつめる渥美の姿は印象的である。

なぜか今朝からも、かずもあはないであた友は、項垂れたまゝ青ざめた頬を手にさゝへて、吸ひつけられたやうな目つきをして、淵の色に見入ってゐる。……中略……顔をそむけてゐた渥

美の頬には涙が伝うてゐた。

「渾らかな人」渥美さえも、内奥の春のめざめにうちひしがれようとしている。彼はそこから自らを救う唯一の手だてとして、死に牽引されている。彼は安良に「みんな大人の人が死なれん／＼いひますけれど、わては死ぬくらゐなことなんでもないこつちや思ひます。……」云々と言ひ、安良を死へと誘うのである。こうした渥美の姿は、自己の内の春のめざめを畏れ、「蕭條たる末路」(初出)をたどった家隆や西行、芭蕉の寂しい境地に惹かれつつ死に親和する安良の姿と軌を一にするものである。同質の方向軸が二本縊り合することに、二人の少年は実際の死へと歩を運ぶ。「口ぶえ」は未完であるが、その最後は二人の少年が岩角へ身をのり出し、墜死しようとするところで終る。渥美が、安良の懊悩を超えた力強いよみがえりを与える存在ではないことは、この結末においても明らかである。では、安良を生へと力強く誘う契機はどこにあるのか。

東郷克美氏は、「口ぶえ」に「宗教的なものによる自己救済への志向」の底流することを指摘し、その意味で少年の大和飛鳥への憧憬に注目している⁽⁵⁾。たしかに安良の心を惹くいくつかの事物の中でも、大和飛鳥の地の存在は際立っている。なぜなら、大和飛鳥を旅する時の安良は、常に青ざめた自分自身を鏡でみつめるような癖――繊弱な反省心や自己嫌悪から解き放たれ、思いきり自己を外へと放散させる力を得ているからである。そこには、西行や芭蕉の詩歌に対する時の安良が抱くような死・遁世への親和は微塵もみられない。彼は大和三山の広がる夏野で放尿し、声の限り歌う。

光はまともに、白い下腹を照らす。その瞬間、彼は非常な力の湧きのぼつて来るのを感じた。彼は憤を氣狂のやうに、ま一文

字に走つた。身も裂けよとばかり、声はりあげて旋頭歌を歌つた。

夏の日射しを浴び放尿する安良の姿には、前掲の湯上りシーンとは異なり明朗なエロスがきらめく。更に祖父の実家に当る飛鳥の古社を詣でた安良は、祖神から現在の懊悩を超克する啓示を受ける。

さうしてゐるのちに、ひろい神の心が、安良の胸に、あたゝかく溶けこんで来る。おまへたちとおなじやうなことをやつて来たわした。そんなことは、すべてわしの前には、罪とは見えな
い。おまへのせなければならぬことは、目のまへにあるではないか、と囁かれるやうな心もちがする。

ここにおいてようやく安良は、己が存在の淵源に逢着したかに見える。その聖域を、折口は、訪れる人もなく野の只中に荒廃してゆく野社として描いている。

古典にしば／＼その稜威を見せてゐる大社も、今では草のなかの野やしろとなつて、古神道のはてを思はせるやうに傾いてゐた。

時流から外れ、顧みられない古い神々と孤独な少年の心との冥合というこの構図には、明らかにメレジュコフスキイの小説『背教者ジウリアノ』を軸とする「神々の死」のモチーフをみることで、きるのではないだろうか。折口が明治四十三年十一月の『ホトギス』に発表されたメレジュコフスキイのこの小説を読み、そこに「生活」や「精神」を感じ深い影響をうけたことに注目したのは、長谷川政春氏である。氏は、折口の發生論をはじめ、小説『死者の書』にもメレジュコフスキイの「神々の死」のひとつの影響がみられることを指摘している。その指摘をふまえながら「口ぶえ」を

みる時、この処女小説にも既に明らかにメレジュコフスキイ『背教者ジウリアノ』の影響が看取されると考えるのである。

『背教者ジウリアノ』は、ローマ皇帝ジウリアノ（ユリアヌス）を主人公とし、新興のキリスト教が蔓延する中であつてその流れに逆行し、古代ギリシャの神々を復活させようとするジウリアノ皇帝の悲劇を描く。「口ぶえ」との関連において注目されるのは、皇帝の孤独な少年時代の精神生活である。ジウリアノは実の伯父に両親を殺害され、兄と共に幽閉されている。常に暗殺の危険に脅かされながら、陰気な教師や僧にキリスト教の宗教問答を教育される日々を送るのである。ジウリアノは、人間に罪や罰、死の観念を強いるようなキリスト教に本能的な反発を覚える。彼の心が求めてやまないのは、晴朗な美や歓び、楽しみを湛える古代ギリシャの神々である。しかしその神々はキリスト教の勢いに逐われ、邪教の神として滅びつつある。ここでメレジュコフスキイはヨーロッパ文学の一つの命題である、キリスト教とそれ以前の神々の対立、すなわち「神々の死」を扱おうとしている。少年ジウリアノは、荒廃した古代ギリシャの神殿や神の森、古い信仰を秘かに守る人々を訪ね、そこで休らぎと新生への力を得る。ある時は彼は木立ちの中に教会の番人によつてこわされたキュービッドの像を見出す。腕の無いその神像の不思議な微笑は彼を強く惹きつける。ある時は牧羊神の像の放置されたままの洞窟でも思いに沈み、ある時は朝の日射しを浴びながら素裸でギリシャの円板投げのゲームに興ずる少女に明朗で無垢な古代の精神を感じ、恋心を抱く。閉塞状況の中で明朗な生命力溢れる古代の神々に傾斜するこの孤独な少年の姿は、古い神々の存在の濃厚な大和飛鳥で自己を解放し、野中の荒れた古社で未来への啓

示を得る安良の姿に通底するものがある。

折口が『背教者ジウリアノ』に感受した“神々の死”のモチーフは、ハイネ『諸神流譚』などとも絡み合い、更に折口自身が民俗採訪の旅で得た実感と重なりながら、彼の学問・創作の一つの基盤としての古代像を形成してゆくわけであるが、「口ぶえ」においてはまだそこまでの成熟度はみられない。この時点で折口が共鳴するのは、孤独な少年の自己回復としての古代への憧憬であり、「口ぶえ」における古代のイメージは、『背教者ジウリアノ』においてジウリアノの憧憬する古代ギリシャのイメージをかなり直接的に受け継いでいると思われる。その例として更に、安良の長谷寺詣での場面をみてみよう。

飛鳥の古社の前に額づいた安良はその後、安居院・橘寺・岡寺などを巡って月が出る頃、長谷寺に着く。観音を祀るこの寺に参籠したであろう多くの平安朝の女性を追懷し、夢み心地になった安良は、ここで不思議な幻影を見る。

太い円柱が所々に立つて、ほの暗い隈をつくつてゐる。安良は音も立てないでつましやかに堂のまはりがあるいて見た。ひとまはりして、もとの舞台に戻つて来て、ふとふりむくと、堂の立部に見をよせてうつと白い姿がうごく。安良は瞳を凝して身じろきもせなかつた。白い姿もちつと立ち止つて動かない。安良は恐る／＼近よつて行つた。白い姿はだん／＼輪廓が溶けて行つて、夢のやうに消えてしまつた。

暗示に富む場面である。「白い姿」はあるいは、平安朝の女性の前に示顯した長谷寺の観音であるのかもしれない。その女性的なるものの幻影は、安良が前に飛鳥の古社で得た未来への啓示に連接す

るものであることが推される。しかしそれが何であるのか明されないまま、安良はそのイメージを喪つてしまふのである。飛鳥の古社に次いで安良の自己回復に重要なこの場面も、『背教者ジウリアノ』を彷彿とさせる。孤独なジウリアノが特に心の拠りどころとしていたのは、近所の森の中にある愛の女神アフロディテの神殿であつた。少年時代の終りに彼がここで見た女神の幻影は、彼に古い神々の復活を決意させる。夕日射す頃、ジウリアノは一人神殿を訪れ、白い大理石の女神像を仰ぐ。

四周は冷たく静まり返つてゐる。柱の大斗は夕日に照され、明るく浮上る襞模様が薄暗い床と対照して、黄金の髪の毛のやうに柔かく輝つてゐる。……中略……目の前に女神がある。社殿の真中の蒼空の下に、アフロデテ・アナデオモーネが、沖の白波から生れ出た儘に、白く冷たく佇んでゐる。(7)

夢み心地になったジウリアノは、女神に抱かれる幻影を見、深い幸福感を得る。

女神が漸々と降りて来た……。竊つと、白い軟かい^{かたな}脇が頸に絡はつた。荒爾してされる儘になつてゐる。大理石の冷たさが心の底まで染み透つた。……

月のでる頃夢から覚めたジウリアノは、再び女神像を仰ぎ、この美しい古代の神に永遠の愛と忠誠を誓うのである。女性の神を祭る神殿・円柱・月のでる頃そこを逍遙する少年と彼の前に現れる女性的な神性の白い幻影という設定は、「口ぶえ」にかなり忠実に投影されているとみることができる。とはいえ、ジウリアノが白い幻影の意味を自己の内しつかりと捉えたのに比べ、安良はそのイメージをさえ見失つてしまふ。この相違は「口ぶえ」を考える上で重要

である。

さて、『背教者ジウリアノ』と「口ぶえ」の連関を見る上で更に注目すべきは、安良が古代のイメージとして「大理石の礎^{イシタマ}」を深く心に留めている点である。大和飛鳥から大阪の家へ戻った安良は、光輝溢れる彼地を忘れ難く、昼間でさえその幻影を追う。

大空の底に、昼の月がほんのりと見える。うつとりとなつた目の前に、古寺の大理石の礎^{イシタマ}や見あげるやうな石のからと、などが、ちら／＼とする。

安良が古代のイメージとして思い描くのは、「古寺の大理石の礎^{イシタマ}」と「見あげるやうな石のからと」である。後者についてはたとえば、石舞台をはじめとして飛鳥に多く残る石の遺跡を当てはめればよいであろう。問題なのは前者、すなわち「古寺の大理石の礎^{イシタマ}」である。そういえば安良の肉体描写にも「大理石の滑らかな膚を、」という箇所があったが、大理石にはどうしても西洋的な要素が濃く纏綿していないのであろうか。そうしたものと古代日本が結びつけられている点に、一種異様な印象をうける。果して安良がそんなに深く印象するほど、大和飛鳥の寺院建築の礎石に大理石が使用されることは一般的であるのか？ 調べてみると、答えは否である。⁽⁸⁾

飛鳥・奈良朝の寺院建築に用いられた礎石は主に花崗岩・凝灰岩など土地産出の自然石であり、僅かに薬師寺金堂仏壇の飾りに白大理石が用いられているのが注目される程度である。礎石としての大理石の使用は、まず無い。唯一の例外は飛鳥川原寺である。川原寺金堂の礎石には白大理石が使用されている。『飛鳥川原寺』（網干善教・昭51 日本放送出版協会）はこの点について「飛鳥から奈良朝寺院跡のなかで、建物の礎石に大理石（石灰岩）を用いていること

は、他の寺院に例を見ないことであって、極めて「特殊」なものであるといえよう。」と述べている。折口がそうした「特殊」な例としての大理石の礎石を、わざ／＼古代日本のイメージに結びつけたのは何故なのか――。安良が飛鳥川原寺に特に強い印象を抱いたというのであれば、その理由は納得できる。しかし「口ぶえ」には、川原寺について一言も言及されていない。折口はやはりここでも、『背教者ジウリアノ』に強く牽引されているのではないか。なぜならば、『背教者ジウリアノ』において大理石は、晴朗な古代ギリシアの象徴としての意味を附与されているからである。ジウリアノを神々の復活へと導く古代風の場所や事物には、必ずといってよいほど大理石のイメージが纏綿する。たとえば、前掲の愛の女神の神殿は次のような外観によってジウリアノを引き寄せる。

イオニア式の大大理石の柱は日光に浸つて、雪のやうに静かに温かい蒼空に聳えてゐる。

また、ジウリアノの敬愛する学者マキシムスの住いは「静かな大理石の房々」を備え、その静謐はジウリアノのうらやむところである。将来を思い悩むジウリアノに、マキシムスは彼が皇帝の座に着くことを予言し、次のように命ずる。

所有物^{あらゆる}を征服せよ。身体は神人を切り出す大理石のやうに堅くあれ。

ジウリアノが恋心を抱くアルシノエも、大理石に埋もれ、神々を彫刻することに心傾ける少女であった……。大理石が理想の古代を象徴する要素として描かれていることは、ジウリアノと同じように古代を憧憬する若者、アントニヌスの言葉に更に明らかである。

ジウリアノ、彼の黒い衣を着た奴を見なさい。彼れは夕暮の影

だ、死の影だ。聽て、昔風の白衣も、日に光る大理石一片も、此の世に跡を絶つのだ。……最早駄目だ。

ここでアントニヌスは黒衣をまとうキリスト教徒を死の影に喩え、その影が古代の神々を滅ぼしてゆくことを嘆く。その際彼が、自分の愛してやまない古代世界を「昔風の白衣」と「日に光る大理石一片」に象徴させている点に注目したい。「背教者ジウリアノ」においてメレジュコフスキーは、意識的にキリスト教世界を陰気な黒色に喩え、それに対して滅びゆく古代ギリシャ世界を輝く白色に喩えている。その白色の一つの代表が、大理石である。彼がジウリアノの憧憬を通して描いてみせる古代は、しばしば大理石の神殿の円柱が蒼空に白く輝く風景であり、皓々たる大理石のオリンポスの神々が居並ぶ風景である。こうした大理石のもつ意味に、折口は知らず／＼の内影響されているのではないか。それゆえに安良は、大和飛鳥のイメージとして、実際には稀有な例である「大理石の礎」を思い浮べてしまふのではないであらうか。「日は、空の雲を焼きつくして、青々とした空虚が何処までも続」く大和飛鳥の夏野に、安良は白く輝く大理石の伽藍の聳える古代の風景を幻視したのかもされない。大和飛鳥は、折口において古代を表す一つの具体像として重要である。その像の形成に、陰鬱なキリスト教世界に対立し明朗な生命力溢れる古代ギリシャ世界への視点が入りこんでいる可能性を、ここで指摘しておきたいと思うのである。

V

閉塞状況の中で生命力溢れる古代の神々に傾斜してゆく安良には、たしかにジウリアノの面影が見出せる。しかし両者の間には決

定的な相違がある。すなわち、ジウリアノがローマ皇帝としての大きな運命を身に備えているのに比べ、安良はそうした運命を持たない、単なる中学生に過ぎない点である。その相違の故であらうか、ジウリアノが自分の前に現出する幻影や神の啓示の意味を自己の内に強く捉え、神々の復活への導きとしてゆくのに比べ、安良はそうした啓示の意味を悉く見失ってしまう。長谷寺の白い幻影も、飛鳥の古社で得た祖神の啓示の意味さえも――。「おまへのせなければならぬことは目のまへにある」との啓示をうけた安良は、さし当り遠縁に当るその古社と自分の家との交流を普通通りに復することが、その啓示の指し示す事だと解釈する。そのために古社の奥に進んだ彼はしかし、生来の人見知りのため誰にも会わない内にそこから立ち去ってしまうのである。安良に対し投げかけられるさまざまな昇華の契機は、このようにすべて暗示に留まり、一つの力へと結集してゆくことが無い。まるでこの小説の中には、ばら／＼の力が撒かれていようであり、それが小説の風景を不透明なものにしているのである。それはあるいは「口ぶえ」が未完であるためであらうか。安良と渥美が崖の岩角へのり出す最終場面の後に折口は、(前篇終)と記している。存在しない後篇に何が起こり得たか、それは想像し難い。しかし「口ぶえ」の不透明は、未完のためというより、この小説の本質に帰結されるべき問題であると考えられる。この小説は本来、一つの分裂を抱えている。それは折口が安良を通して性欲に悩む少年の日常を描こうとしながら、一方でそこに、賤しめられる期間を経て昇華する神の像を透し見ずにおられない点である。「口ぶえ」には、きわめて自然主義的な私小説の中に神話の要素が割り込んでいるような異和感がある。春のめざましに悩む中学生、安

良には、時として賤しめられる神の性格が見え隠れする。前述のように、体操教師に上衣をはがされ、壇上に立たされた時、それは最も顕著にあらわれる。さまざまな昇華の契機は、彼の内に潜むその神性によってこそ強く捉えられ、何らかの形をとった昇華を結実すべきものであったろう。しかし一切の虚構をふりすて、少年期の真実を少年と同じ視点からみつめようとする「口ぶえ」のもう一つの方向軸は、それを拒否する。その方向軸はむしろ安良を死への親和に近づけ、同じ懊悩を抱える渥美との墜死の涯へ彼を誘うのである。

光明を求め彷徨する精神とそれを導く古代の神の力という、「神々の死」のモチーフが影を落す構図において、「口ぶえ」は既に晩年の小説『死者の書』に深く連結する要素をもつ、しかし『死者の書』においてその構図が、大津皇子と彼のために機を織る中将姫との直線関係に凝集され、最終部の大津皇子の復活に向けて鮮明な浄化感を形成しているのに比べ、「口ぶえ」の最終部は糸の切れた風船のようにたよりない。渥美と安良は蓬々と吹く夕風の中、途方にくれて見つめ合う。彼らを導くものははや死しかない。しかし悩みつかれ、万策つきてお互いをみつめるその蒼ざめた少年の顔の哀れこそ、この時点での折口の最も描きたいものではなかったか。悩み蒼ざめる少年の顔は、永遠の少年として折口が多分生涯持ちつづけた顔である。仮託性に秀れた彼は、それをある時は旅にあつて故郷を恋うヤマトタケルノミコトに、ある時は冥界の母に呼びかける大山守命に、ある時は死者に憧憬を寄せる中将姫に託し、神話的空間の中に結晶させた。しかし「口ぶえ」では折口は、結局何の浄化も与えず、幼い中学生の顔のままを吹きさらしの夕風の中に浮び上

らせる。浄化を志向する方向と、それを拒み地に留まろうとする方向と。「口ぶえ」は作品としてたしかに一つの分裂を抱えている。しかしそこには「固定」を嫌い、「刹那」「盲動」に突き進もうとする二十六歳の折口の激しい気迫がうかがわれる。「口ぶえ」の未定は、その意味で魅力ある未定だといえることができるのである。

注

- 1 第六歌集「倭をぐな」（全集22）所載。
 - 2 東郷克美は「大正三年の折口信夫」（昭59・11「折口博士記念古代研究紀要」）において、「口ぶえ」に折口学と符号する貴と賤、聖と穢の併存の論理が存することを指摘している。
 - 3 全集未収録。
 - 4 長谷川政春「海やまのあひだ」論（昭52・6「国文学」）に拠る。
 - 5 2に同じ。
 - 6 『古代研究Ⅵ国文学篇2』（昭52・10「角川文庫」付載「解説・折口信夫研究」参照）。
 - 7 以下、「背教者ジウリアノ」の引用は、明治43年11月『ホトトギス』発表の島村冬三訳に拠る。
 - 8 川勝政太郎『日本石材工芸史』（昭32「綜芸社」、福山敏男『寺院建築の研究』（昭57「中央公論美術社」）等参照。
 - 9 大正三年の『日刊不二新聞』において折口は数回、文芸時評を発表しているが、その中にしばしば文学の一つの指標として、固定を拒み瞬間の充実によって生を進展させる「盲動」「刹那」という観念がでてる。長谷川政春「思想語としての「盲動」——折口信夫と岩野泡鳴との出会いの意味」（『こにも』一人門弟子が「折口信夫と牛島軍平」昭53・フェニックス出版所収）は、そこに岩野泡鳴の刹那主義の影響のあることを論じている。
- 〔付記〕 折口信夫所蔵『日刊不二新聞』所載「口ぶえ」切抜資料の閲覧については、折口博士記念口代研究所のご厚意を賜ることができました。この場をかりて御礼申し上げます。